

## QUALIFY

NOVEMBER 11 [SAT] RAIN / WET

事前の天気予報では曇りだった11月11日(土)の予選日だが、朝から濡れた路面が残る曇り空。午前9時05分からのウォームアップもシンティアム アップル KTMは走行を見合わせ、午後1時20分からの公式予選に臨むことになった。

ただ、午後もなかなか天候が回復しない。ポツポツと雨が降ったり止んだり、ウエットコンディションは変わらず。そんななか、まずAドライバー予選に臨んだ井田だったが、難しいコンディションのなか1分55秒307を記録するも、こういった状況下ではやはりプロが速い。#47 アストンマーティンに対しては差をつけられてしまう。続くBドライバー予選でも加藤

が1分52秒045を記録するも、やはり#47 アストンマーティンに及ばず。今季初めてクラスポールポジションを譲ることになってしまった。

とはいえ、大事なのは翌日の決勝。Cドライバー予選では高橋一穂が1分57秒318、Dドライバー予選では吉本大樹が1分54秒870を記録し、レースを見据えながら作業を進め、予選日を締めくくった。



## RACE

NOVEMBER 12 [SUN] CROUDY / DRY



いよいよ今シーズンのラストレースとなった11月12日(日)の決勝レースは、1万6600人もの観衆が訪れ、賑わいのなか迎えた。シンティアム アップル KTMのスタートドライバーを務めたのは井田だ。

スタートから井田は#47 アストンマーティンを追いつきながらレースを進めていくが、前日から渡邊信太郎エンジニアは序盤から2台の間にST-Z車両が入り、その間にギャップを築かれてしまうことを危惧していたが、3周目には間にST-Zの首位争いが3台入ってしまい、その危惧が当たってしまう。井田はなんとか8周目には#47 アストンマーティンの後方につけたが、ややギャップが広がってしまった。

ただその後井田はタイヤが厳しい状況ながらペースを上げていく。一方の#47 アストンマーティンは30周を終え90秒ストップのAドライバーハンディを消化したため2台の順位は逆転。シンティアム アップル KTMは34周を終えピットインし、吉本大樹に交代。1分半ほど開いたギャップをさらに広げにかかった。

吉本はさすがのペースで、プロ同士が繋いでくる#47 アストンマーティンを近づかせまいと、自らのス

テントをきっちりこなし69周を終えピットイン。ピットで待ち受けた高橋一穂が乗り込んだ。

高橋は少しずつ路面温度が下がりコンディションが悪くなっていく状況のなか、粘りの走りをみせていくが、いまひとつエンジンパワーが弱くなっていくのを感じていた。そんな中、86周目には集団のなかでスピンを喫してしまい、一度タイヤ交換を実施。このピットインで2台の差は逆転してしまった。

とはいえ、前戦岡山のようにアンカーの加藤寛規が追い上げれば、まだトップは射程圏内。94周を終えピットインし加藤に交代し首位を迫る体勢をとったが、交代した加藤からは「ブーストが上がらない」という連絡が入ってしまう。97周を終えシンティアム アップル KTMは緊急ピットインを行うことになった。

もしこのままリタイヤを喫してしまうと、チャンピオンの座さえも#47 アストンマーティンに移ってしまう。ただ、トラブルはインタークーラーに発生しており、ターボは動かないまでも、エンジン自体は動いていた。ここまでの3人のドライバーの頑張りにより、完走となる70%のレース距離をこなすことは可能と判断。シンティアム アップル KTMは44分をピットで過ごし、加藤に最後の走行を任せると、レースの残り10分でピットアウト。なんとかチェッカーを受け、ST-1クラスの2位にとまった。

薄氷のレースとなったものの、これでシンティアム アップル KTMは3年連続のチャンピオンを決めてみせた。

